



聖生まる

亀山雲平顕彰会

代表長野哲

新しい年が明けたばかり、東天よりまばゆいばかりの五彩の光が輝き、白堊の姫路城を浮かび上がり城下の町々が静かに明けてい

く頃、姫山の東方五軒邸では元気な男の子が生まれていた。時に文政五年一月二十日、父亀山百之と母頼家の間に生まれた二男恭吉、後の雲平である。

この年、播磨の国にとって、特筆すべき二件の学校の完成があった。藩校好古堂の移転大拡張と、他方、家老河合寸翁の創立した、仁寿山塾の開校である。

この二学舎の建設に依り、雲平の学者への道が運命づけられたのであった。

兄剛毅は好古堂を卒業して、仁寿山塾へ進学し、雲平は好古堂で

学ぶのである。この兄弟の学問に対する情熱が、後に聖人雲平となる生涯に大きな影響を与えてゆくのである。

恭吉は長じるにともない名を改めていた。式毅、由之、敬佐、源五右衛門、美和、雲平、号、曳庵、節宇と称した。

雲平十才の時、父百之が死んだ。悲しい悲しい出来事であった。しかし、母は賢婦であった。夫を亡くしたつらさを隠し健氣にもかえつて雲平たちに一層学問に励むよう諭すのであった。

翌年、雲平は藩校好古堂に入り、藩儒角田省三郎義方（号＝櫻園）について経史、詩文を学ぶこと数年、学力優秀につき十八才にして

佐藤一斉は岩村藩家老の一男で

この年雲平は、藩主、酒井雅楽頭忠寶にお目に見得する。そして、好古堂勤務精勤につき金五両と、今後も尚一層学問に精励せよとのお言葉を賜り、身に余る光榮と感

激に胸躍らせ、益々文章報國を図く心に誓うのであった。

この頃幕府は政策に行詰りを感じて雲平たちに一層学問に励むよう吹き込もうとしていた。全国三百諸藩に対して優秀な人材を送ることを奨励していた。姫路藩も亀山雲平を選び、江戸官学昌平塾に入学せしめ佐藤一斉に学ばせた。



幕府官学昌平塾の絵図（寛政十一年改築当時のもの）

本奎士松重野修吏局長内閣友に昌平じ頃同

聖、賢人と称される教育者、学者となつた素地は、この昌平塾時代に培われたのであった。

き、教育の神髄を学びとったのである。明治に入り国が治まって後私学校を設立して、人々をして学んだ結果、當時一千人を越える藩士に任命、當時一千人を越える藩士の子弟の教育に専念せしめた。併せて大監察という特権を持つ役職にも任命し、乱れた藩論の統制に当たらせるのであった。

江戸にすること十年余、ペリーの浦賀来航を初め国内外の大きな出来事を体験した雲平に、藩主は大きな期待を寄せていた。雲平が姫路に帰るや直ちに好古堂の教授に任命、當時一千人を越える藩士の子弟の教育に専念せしめた。併せて大監察という特権を持つ役職にも任命し、乱れた藩論の統制に当たらせるのであった。

明治に入り雲平は、青松白砂の景勝地白浜に私學「観海講堂」を創設し、昌平塾に学んだ教育を実践する。この雲平の座右名は「國爾忘家」、即ち國を思い、家のことは考えない滅私奉公の精神である。この滅私奉公の精神に加え、高い教養と広い見識、高邁な思想と人生觀を持った雲平の生涯変わることのなかつたヒューマニズムな精神は、今も脈々として生きづき伝わってくるのである。正に聖人学者である。

ある。藩主の子が林家を継ぎ林述斎と称し、昌平塾を主宰していた。一斉は主筋に当たる林述斎を助け、述斎「き後も昌平塾の發展に生涯を尽くした人である。

雲平はこの偉大な学者一斉につき、教育の神髄を学びとったのである。明治に入り国が治まって後私学校を設立して、人々をして学んだ結果、當時一千人を越える藩士に任命、當時一千人を越える藩士の子弟の教育に専念せしめた。併せて大監察という特権を持つ役職にも任命し、乱れた藩論の統制に当たらせるのであった。

江戸にすること十年余、ペリーの浦賀来航を初め国内外の大きな出来事を体験した雲平に、藩主は大きな期待を寄せていた。雲平が姫路に帰るや直ちに好古堂の教授に任命、當時一千人を越える藩士の子弟の教育に専念せしめた。併せて大監察という特権を持つ役職にも任命し、乱れた藩論の統制に当たらせるのであった。

明治に入り雲平は、青松白砂の景勝地白浜に私學「観海講堂」を創設し、昌平塾に学んだ教育を実践する。この雲平の座右名は「國爾忘家」、即ち國を思い、家のことは考えない滅私奉公の精神である。この滅私奉公の精神に加え、高い教養と広い見識、高邁な思想と人生觀を持った雲平の生涯変わることのなかつたヒューマニズムな精神は、今も脈々として生きづき伝わてくるのである。正に聖人学者である。

浜島敏雄

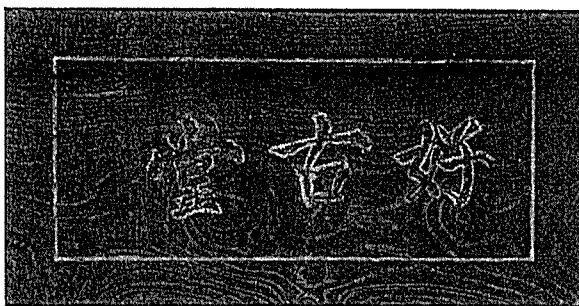
龜山雲平が好古堂に入學して角田心藏に師事したのは天保四年（一八三三）雲平十一才のときであつた。

播磨聖人と仰かれ、多くの人々の尊崇をうけた雲平の幼いときには、その薰陶を受けた師、その與えた影響も大きかったと考えられる。心藏も並の人ではなかつたかと思われる。「なかつたか」というのは彼の事蹟も、遺墨も皆無、何一つ残されていないからである。

徳は五輪氏にある天台宗の古刹
正明寺に葬られたのであるが、戦
後姫路市の都市計画などのため広
大な墓地にあつた墓石の大半は名
古山に移された。そのときからで
あろうか心藏の墓碑の所在が不明
になつてゐる。墓表銘は雲平の撰
になるところで、その稿が遺稿集
におさめられている。それが心藏

に関する唯一の資料である。(姫路城史に「三散見する」これを基にして角田心藏を偲んでみたい。心藏は、天明七年(一七八七)の生れでその月日は分からぬ。

為シテ小吏ヨウリ、支金シキン四両ヨリヨウ廩食リョクシキ一口イチコト菽水シキス不ハ給ジケル、四両ヨリヨウ一人イチジン扶持ヒツジの輕輩キヨハサゲである。菽水シキス豆マメと水ミズしか食べエサフなかつたと極言キヨガタニしているほどの微祿ヒロクの苦しい様子ヨウジを述べたのである。



林大學頭信篤畫（姫路神社所藏）

心藏の好古堂教授に任せられた
年について、『姫路城史』では嘉
永三年（一八五〇）とし、『姫路
市史』（大正八年刊）においては
嘉永二年となっている。『姫路紀

辛丑又加廩食一口是年謙光公
臨藩擢為教授改賜廩食十口
辛丑は天保十二年（一八四一）
謙光公は藩主忠志（ただのり）である。入部の
年にあたつていて八月半ばに帰城
している。このとき心藏は好古堂
の教授に抜擢され改めて十人扶持
を賜り、身分も給人格となり肩衣
をゆるされ、天保十四年には近習
席に連ねることになる。

隠桑有阿
其葉有難
既見君子
其樂如何
沢辺の桑のうるわ
しき
その葉は美しく茂つ
てゐる

これを機にしてか、この年心藏と改称している。其更称「心藏取諸小雅心乎愛矣云々蓋有^レ意也。これは詩經小雅の隠桑（沢刃の桑）から取ったものである。蓋意有るなりとある。その意のあるところを探つてみたいので少しこなるがその詩と意訳をあげる。

この詩は男女相愛の詩である。小雅は朝廷で奏せられる詩なので、この詩の君子は賓客で徳音はよきほまれとなり、賢人を愛して忘れぬ主人の心を託したのだ、との解

いつも変わらぬそ
のやさしさ
心に愛して居りな
がら
なぜに謂われぬ
この思いを心に抱
いて
いつの日にか忘れ
よう

心乎愛矣
遇不謂矣
中心藏之
何日忘之

最後の運から取ったのである。

君子に相見えて	隠桑有阿	澤辺の桑のうるわ
その樂しさいかば	其葉有沃	かり
既見君子	既見君子	その葉は美しくう
云何不樂	云何不樂	るおうている
君子に相見えて	君子に相見えて	君
樂しまないでどう	樂しまないでどう	子
しよう	しよう	に
隰桑有阿	澤辺の桑のうるわ	よ
其葉有幽	其葉有幽	う
既見君子	既見君子	う
徳音孔膠	徳音孔膠	う
君子に相見えて	君子に相見えて	う
いつも変わらぬそ	いつも変わらぬそ	う
のやさしさ	のやさしさ	う
心乎愛矣	心乎愛矣	う
遐不謂矣	遐不謂矣	う
中心藏之	中心藏之	う
何日忘之	何日忘之	う
いて	いて	う
いつの日にか忘れ	いつの日にか忘れ	う
よう	よう	う
最後の連から取つたのである。	この詩は男女相愛の詩である。小	この詩の君子は賓客で徳音はよき
雅は朝廷で奏せられる詩なので、	ほまれとなり、賢人を愛して忘れ	ぬ主人の心を託したのだ、との解

「播磨聖人、龜山雲平顕彰会」の 発足に寄せて

島田 清

没後九十年を経た平成二年、「播磨聖人、龜山雲平顕彰会」が誕生した。

雲平が、かねてから志した学者・教育者の道に精進し、生涯の事業として情熱を傾けた「観海講堂」の所在地、白浜においてある。まことに意義ふかいことといつてよからう。

去る六月一日、この会の機関誌『青松白沙』が創刊された。会の代表、長野哲氏は、冒頭の「発刊にあたって」に、

「雲平の人格・識見・思想などを知ることによって、学者としての、教育者としての大きな存在を更に探求して、世に広め、その偉大なる遺徳を顕彰し、永く後世に伝えようとするものである。」

と、述べておられる。事業の重要性を確認し、それへの邁進を力強く誓つておられる点、まことにすばらしく、りっぱだ。わたくしは、

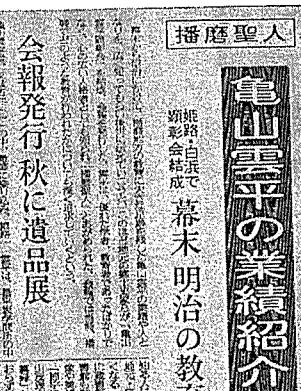
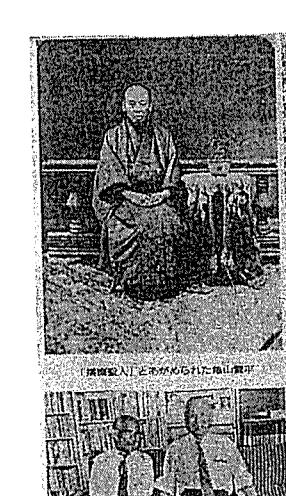
心から敬意を表するとともに、事業の進展を祈つてやまぬ。

由来、白浜の地は、白砂青松の勝地として、瀬戸内式風景の一環を形成してきた。前にひろびるとした播磨灘を望み、うしろに麻生・仁寿の両山を負い、両者の間に広い沃野を抱くこの地が、早くからすぐれた文化を展開したのは、また、ゆえあることであろう。弥生時代の明田貝塚、古墳時代の奥山塚、初期仏教文化期の貝塚、山獄仮教興隆期の麻生山修験道遺跡、八幡信仰発達の裏面拠点となつた松原八幡神社、など、いずれも、

それぞれの時代の顕著な遺跡であつて、播磨の中心部、播磨平野の一部をかたちづくりながら、別に、一箇の小天地を形成するかのごとき実態を見せてているのはユニークだ。

近世後期、この地の一角に仁寿山巣が興された。学問習得の上に、また、社会・経済の実情を把握するために、この地域が好適だと考

えられたためである。この発案者は河合寸翁の慧眼と抱負は、今なお、深い啓發と示唆を与えている。



「龜山雲平顕彰会」

神戸新聞に紹介される

平成二年五月二十日付で発刊した龜山雲平顕彰会の機関誌

新聞に紹介された。

図書館をはじめとする公的機関は勿論、多くの個人からも「青松白沙」の送付依頼が舞い込むとともに、史料を紹介する便りが届いた。

龜山雲平への人々の関心の高さに驚くとともに、会員一同はさらに身も心も引き締めるところである。

「青松白沙」の二号発刊にあたり、なお一層の情報の提供をお願いするものである。

のあいだには、それが強調されたり、弛緩したり、したことがある。

「播磨聖人、龜山雲平顕彰会」も、そうした中に位置づけられるものである。わたくしは、長野哲氏

在、たまたま、それが強調されることとなつたのは、その必要が痛感されたためである。われわれは、古くから続くこの流れの中に新風が、吹き込み、新しい時代の要求に

感されたためである。われわれは、以下、同志のかたがたが、それぞれの分担務に精進し、互いに連絡、協調して、その成果をあげらるよう熱望して擧筆する。

適合するようつとめねばならぬ。